

## 研究ノート

## ファレスにおける「マチズモ」信仰と「フェミサイド」

宗形 賢二<sup>※1</sup>

Femicide and Machismo in Ciudad Juárez

Kenji MUNAKATA<sup>※1</sup>

## ABSTRACT

At the turn of the century, the border city Ciudad Juárez in Mexico became notorious around the world for its extraordinary number of murdered women. A 2005 Amnesty International report gave the figure of 370 young women and girls murdered in Juárez and Chihuahua since 1993. Most of the victims were poor and many worked in maquiladoras, and according to Amnesty at least a third suffered sexual violence. Because of the corruption of the police, municipal politicians and even parts of the federal government, it was very difficult for the victims' families to have recourse to law or to change politically the atrocious situation in the city. My paper focuses on the representation of these events in the 2006 American film *Bordertown* by Gregory Nava. Through an analysis of the film, and against the backdrop of globalization and high levels of poverty in Juárez, I discuss some of the causes for these femicides, paying particular attention to the culture of machismo in Mexico.

## 1 国境の町ファレスの連続殺人

図1<sup>1)</sup>

テキサス州エル・パソとの間に流れるリオ・グランデ川の対岸に、人口150万人のメキシコ8番目の都市シウダー・ファレス (Ciudad Juárez) がある。他の国境の町 (ボーダータウン) の例にもれず、対岸

のエル・パソという産業都市と共存関係にあり、アメリカの消費欲を満たすための工業都市となっている。ファレスが有名になった理由の一つは、治安の悪さである。2008年以前は毎年平均200人程度の殺人件数が、2009年には2,000人を超え、世界で最も危険な都市の一つとなった (多くは麻薬がらみである)。この数字は、10万人では133人となる (2005年の人口150万人を基準とする)。全米4位の200万人都市ヒューストンでさえ治安は良くないといわれるが、殺人は10万人中13人という数字は、ファレスより10倍以上も安全な都市ということを示している<sup>2)</sup>。ちなみに全米平均殺人発生率は、2010年で4.2件、日本での殺人件数は、2009年で10万人当たり0.4件である。

ファレスが国際的に注目される町になったもう一つの理由は、1993年以降の連続女性殺人 (Femicide / Femicide) である。フェミサイドという語の定義は「相手が女性であるがゆえ殺すこと」といわれ、1992年から使われだしたといわれている<sup>3)</sup>。問題は、

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University, Professor

この連続する犯罪の動機がまだはっきりと分かっていないことである。殺し方の残虐さ、異常さ、犠牲者の多くが若い女工である点、警察や行政の対応の悪さなどが、かえってこれらの殺人を異常なものにしている。

2002年の『エル・パソ・タイムズ』(*El Paso Times*)におけるヴァルデス(Diana Washington Valdez)の報告によると、この日墨国境地域で1993年から2002年までに殺害された総数は320人という<sup>4)</sup>。

国際アムネスティの報告によると、シウダー・ファレスでは、1993年から2005年までで、370人以上の女性が殺害され、その三分の一以上が性的虐待を受けていたという<sup>5)</sup>。この地域のある民間団体の調査では、400人以上の女性殺害に加え、4500人の女性の行方不明者がいるという<sup>6)</sup>。ファレスでの女性殺害はその後、2009年に164件、2010年に306件と増加の一途であった<sup>7)</sup>。ファレスの女性保護団体によれば、1980年代には10人に1人の女性殺人が、1990年代には10人中6人と急増している<sup>8)</sup>。現在でも、「フェミニサイド」をネット上で検索すると虐殺された膨大な女性たちの写真が出てくる。これらの一部は作り物だとしても、このような写真や映像を見て快楽を得る人々がいるのは事実である。ファレスでの連続女性殺人における犠牲者も、暴行、強姦の後に絞殺や射殺や刺殺され、その遺体は乳房や性器が切り裂かれ、至る所に文字などが切り刻まれている。その拷問、強姦、虐殺、さらに遺体遺棄のやり方にも共通点があるという<sup>9)</sup>。しかし、警察は、犯人探しに本腰ではなく、単独犯か組織的犯罪かも分からないでいる。当局の言い分は、男性もたくさん殺害されている、麻薬がらみだ、売春婦として二重生活を送っていて犯罪に巻き込まれた、等々であった。さらに事態を悪化させたのは、行方不明や殺害された娘の母親たちやその援助団体などが、当局にきちんとした犯人の捜査や救出活動を求め始めると、不名誉な事件隠蔽のため(観光資源対策として)、警察や役人がその妨害を始めことであった。結果的に、メキシコ政府の対応の杜撰さは、さらに世界の関心を集めることになった。

この論考では、2006年に集中的に公開された映像作品を中心に、なぜメキシコのファレスで女性連続殺人が続いたのか、その原因を考察し、メキシコの「マチズモ」(男らしさ)を分析することで、貧しい伝統的な旧社会に住む少女たちが、急激なグローバルizmの中で犠牲者となった理由を明らかにしたい。

## 2 映像化された「フェミニサイド」

2001年のドキュメンタリー・フィルム、『夢の町』(*City of Dreams*, Bruno Sorrentino監督)では<sup>10)</sup>、17歳の少女、主人公のサグラリオ・ゴンザレス(Sagrario Gonzalez)が、長女として家族の助けとなるため、国境の町ファレスの「マキラドーラ」で仕事をしている。マキラドーラとは、製品組立工場、または保税加工工場=メキシコの米国国境に近い町に建設された米国向け組立工場=外国資本で工場を作り、現地では低賃金の労働力を確保し、原材料輸入の際の関税を無くし、製品組立後輸出する工場のことである。ある日上司から勤務時間の変更を告げられ、午後3時45分退社後、行方不明になってしまう。一週間ほど前、工場に彼女の写真を撮りに来ていた者がいた。マキラドーラではよくあることだった。彼女はそれほどきれいでモデルの様であったのだ。家族(母、妹、弟)は警察にも届けたが、逆に不快な目に遭い、結局、本人かどうかも分からない死体を持って来られ、それを埋葬するしかなかった。サグラリオの死は1998年とされる。これは、メキシコにおける女性殺人の犠牲者の典型的なイメージにもなった<sup>11)</sup>。このドキュメンタリー・フィルムで、メキシコにおける女性殺人の特異性が描かれると同時に、組織的犯罪、麻薬取引、「北米自由貿易協定」(NAFTA)、性差別による主従関係、労働及び性の搾取、貧困等の社会状況が俯瞰できる<sup>12)</sup>。

2006年の『オン・ザ・エッジ:シウダー・ファレスにおける女性殺人』(*On the Edge: The Femicide in Ciudad Juarez*, Steev Hise監督)もまたファレスでの女性連続殺人を扱ったドキュメンタリー・フィルムである。母親や女性支援者たちへのインタビューを中心に、ファレスの社会的背景が語られる。メキシコの麻薬取引量は、年間少なくとも100億ドル(約1兆円)、自由貿易のためにそれまでのトウモロコシやコーヒーなどの伝統的農産物では生活が成り立たず、少しでも利益が上がる麻薬を栽培する農民が増えたからである。また、土地を追われた農民の多くは都会へ出ざるを得ず、特に若い女性は、器用で仕事も早く、安い賃金でも不満を口に出さず、工場労働者として適任であった。この背景には、従順で我慢強く口答えなどしないように訓練されたメキシコ人特有の家庭環境がある。この保守的伝統的なジェンダー役割が、皮肉なことにグローバル化する資本主義のシステムと結びついた、すなわちNAFTAがファレスの女性連続殺人の大きな原因であったのだ。同じく2006年に、ケビン・ジェイムズ・ドブソン

(Kevin James Dobson) 監督の『ファレスの乙女』(*The Virgin of Juarez*) は<sup>13)</sup>、ロサンゼルス新聞の女性記者カリーナ (Minnie Driver) が、ファレスの連続女性殺人を取材するためにファレスに行き、ある殺人事件の生き残りマリエラ (Ana Claudia Talancon) と出会う。ここまでは『ボーダータウン』と同じ話だが、エレーラという神父が登場したり、マリエラが聖母マリアの幻をみることで暴行や虐待を受けた心の傷を癒され、さらに彼女自身が病院を抜け出し教会に行き、人々から「聖人」として崇められ、殺人鬼の犠牲となった者の家族に希望を与えたりする。すなわち、リアリズムと同時に地元の人々の狂信的な宗教的土着性をも表現しようとした点で、この作品の特異性を表現している。

グレゴリー・ナヴァ監督 (Gregory Nava) の映画『ボーダータウン：報道されない殺人者』(*Bordertown*, 2006) でも、米墨国境沿いの町における特殊な政治的、社会的、経済的状況における従属的女性像がどのように生まれるかが描かれている。しかし、映画では犯人らしき人物は特定できたが、実際のところ、その背後にどのような組織が関与しているのかは分からないままである。NAFTAで激増した麻薬取引により力を付けた裏組織と、この連続女性殺しがどこかでつながっている可能性は高い。この映画の俳優陣を含めナヴァ監督自身も、撮影を止めるよう何度も脅迫されている。喉を切られた鳩を送りつけるというような脅迫、すなわち、パロマ=白い鳩=若い女性の死を意味する“Death Threats”である。ファレスでの撮影では、娘を殺された母親たちも協力してくれたが、銃を装備した警備員も雇いながらの撮影となった。撮影場所をファレスからニューメキシコ州へ変更し、映画完成に至るが、ファレスでの公開時、ポスターをマシンガンで蜂の巣にされ、映画館自体も発砲を受け、撮影に協力した母親たちも脅迫状を受け取ったという<sup>14)</sup>。ファレスでの女性殺人の解明を阻止しようとする何者か、あるいは何かの組織が存在しているということだ。

### 3 北米貿易協定 (NAFTA) とボーダータウン

北米自由貿易協定を背景にして、先進国アメリカと後進国メキシコの対比が、この国境の町 (ボーダータウン) で展開する。ナヴァ監督がインタビューの終りでいうように、ボーダーは「第一世界と第三世界が接する世界で唯一の場所」である。北米自由貿易協定のために、クリントン大統領とゴア副大統領は、他の共和・民主両党の大統領経験者も巻き込み

ロビー活動を活発に行った。クリントンによれば、この協定で「アメリカ側には最初の年だけで17万の新たな仕事生まれる」、さらに、メキシコ人たちの収入が増え、不法移民が減ることになると協定推進者たちは確約した。しかしその結果は、メキシコの農業は疲弊し、経済格差は埋まらず (例えば1992年時点で、メキシコ人の上位10%が総所得の38%を得ている)、1995年には、通貨ペソは対ドル50%の暴落、さらに100万人のメキシコ人が失業してしまった<sup>15)</sup>。外国資本の工場マキラドーラのお陰で1993年から2008年までに約66万件の仕事が増えたが、同時に、外国資本 (米、仏、独、日など) ゆえに工場のメキシコ製部品の利用率は下がり、メキシコ国内の産業は疲弊し、仕事は激減、毎年100万件の新たな仕事を供給しなければ現在の労働人口に見合う状況にはならない。NAFTAのために、特に地方の農業は大きな打撃を受けた。この自由貿易協定のために、アメリカ合衆国から大規模な「アグリビジネス」(agribusiness) の生み出した農産物が輸入され、メキシコ国内の小規模農家はまったく太刀打ちできず、1993年から2008年までに230万人の農民が土地を追われ、公式の経済指標に載らない下位階層になるか、アメリカへ移民するかしなければならなかった。アメリカから輸入されるようになった大量の加工食品は、メキシコ人の肥満率を上げ、成人の33%に上る。NAFTA開始以来、実質的最低賃金は25%下落し、2006年には、地方の55%の人々が貧困生活のレベルまで落ちてしまった。その結果、米墨の賃金格差は、2007年で5.8倍にもなった<sup>16)</sup>。貧困者がメキシコで生きていくためには、犯罪に手を染めるか、極端に安い賃金でもマキラドーラで働くか、そこでも仕事が無ければ、アメリカへ越境するしか選択肢がない状況が生まれている。全米の不法移民数の推移は、2012年の時点で1200万人近い。その中で最大の不法移民はメキシコからの移民者で600万人、全不法移民者の半数という数字である<sup>17)</sup>。

国境の町ファレスはまさにこの経済格差の中心的トポスである。ナヴァ監督『ボーダータウン』では、この経済格差による支配者と被支配者の構図が分かりやすく描かれる。ファレスの工場主を親に持つ裕福なマルコ・サラマンカが、メキシコ人でありながらアメリカ市民権がある「皆の憧れ」の「グリンゴ」(gringo) =白人の外国人=アメリカ人という立場である<sup>18)</sup>。彼ら一族は、米墨両国の政治家、財界人と共にNAFTA実現のために貢献し、マキラドーラの工場で成功を収めている。そこで働く女工たちの日

当は5ドル、機械音しか聞こえない青白く光る工場  
で、絶えず監視の目に晒されながら定期的に「作業  
を早めて下さい」(“Accelerate Production”)と機械的  
な音声でくり返される映像は、非人間的で息苦しい。  
ナヴァ監督の目には、労働力と性的搾取をされる「メ  
スティソ」(白人と先住民インディオとの混血)の娘  
たちが、アメリカ資本主義の犠牲者としてしか見てい  
ない。

『ボーダータウン』において女工として工場に潜り  
込んだローレン(ジェニファ・ロペス)が、誘拐さ  
れ連れて行かれた場所には、これまで殺された多数  
の死体が捨てられている。ここは自動車のスクラッ  
プ工場であったが、当時、メキシコ全体の車の保有  
率が37%だった時、ファレスでは70%の人々が保有  
し、車の窃盗も多発し、解体作業場には犯罪を呼び  
込む背景があったことを教えてくれる。これは、マ  
キラドーラやNAFTAにより人口が急激に増加し(1990  
年代にはメキシコで第4位の人口)、同時にアメリカ  
から大量の中古車がファレスなどの国境都市に流れ  
込んだ状況を示している。同じく、携帯電話の普及  
率も全国平均が15%にも満たない時に、ファレスで  
は人口の約半数が使っていたという<sup>19)</sup>。

もともとメキシコの北部、チワワ州の田舎町であ  
ったファレスは、アメリカとの貿易等により急激に近  
代化された町である。社会の基層には、インディオ  
の民間信仰やカトリックの神秘的な秘跡を生活信条  
とする前近代的な人々の生活があった。そこにアメ  
リカ経由の経済資本や先端的現代文明が次々と入り  
込み、急速に産業化が推し進められ、過去と現在と  
未来が幾層にもなって一度に目の前に出現したよう  
な混沌とした空間の中で、人々がその変化に戸惑い  
ながらも従わざるを得ない状況が生まれた。その結  
果、近代化に付いて行けなかったり、押しつぶされ  
たり、反発した人々が、麻薬・人身売買、誘拐、売  
春、窃盗、殺人等々の犯罪に関わることになったと  
いう見方もできよう。ファレスでの少女連続誘拐殺  
人の土壌は出来ていた。

#### 4 『ボーダータウン：報道されない殺人者』

『ボーダータウン：報道されない殺人者』は、この  
ような労働搾取に性的搾取が重なる中で起こった連  
続女性殺人の生き残りとなる少女エヴァ(16歳)の、  
殺人鬼だけでなくメキシコ社会をも相手にした戦い  
の物語である。ファレスのマキラドーラでモニター  
を作る毎日のエヴァ・ヒメネス(Maya Zapata)は、  
仕事帰りに突然誘拐されてしまう。家は工場から離

れた電気も水道もない辺鄙な場所で、途中砂漠を通  
らなければならない。バスの運転手とグルになった  
変質者の、暴行、強姦、絞殺、砂漠での死体遺棄が、  
過激な映像で描かれる。映画の中で繰り返す描かれ  
る、女性への虐待と異常な虐殺行為は、いわゆる「ス  
ナッフ・フィルム」と呼ばれ、ネット上に蔓延する  
殺人の記録と同質である。奇跡的に息を吹き返した  
イルマは、地面から目を出す植物のように地中から  
這い出て来る。この町にフェミサイドから生き残っ  
た者がいる、という話を、ジャーナリストのローレ  
ン・アドリエン(Jennifer Lopez)が聞きつける。  
ジャーナリストのローレン・アドリエン(Jennifer  
Lopez)は、「悪魔と地獄へ行って逃げ帰った」エヴァ  
と偶然地元新聞社で出会う。アルフォンソ・ディア  
ス(Antonio Vnderas)の経営する新聞社『エル・ソ  
ル』に、母親と助けを求めてやって来ていたのだ。  
「女性の保護より隠蔽の方が安い」がゆえに、地元市  
民はもちろん、州政府も企業も警察さえも、汚職に  
まみれ、影の組織や面倒を恐れ、手だしが出来ない  
でいる。唯一この新聞社だけが弾圧に屈せず報道を  
続け、もしかしたら味方になってくれるかも知れな  
いという噂を聞きつけたのだった。ローレンは、シ  
カゴの新聞『シカゴ・センチネル』社からこの地  
域の連続女性殺人の取材のため派遣されたメキシコ  
系アメリカ人であった。エヴァと共に時を過ごすう  
ちに、彼女がメキシコ南部のオアハカという州の貧  
しいインディオとして生まれ、税金を払えない一家  
は土地を追われ、父はアメリカへ出稼ぎに行き、た  
とえ日当5ドルであろうと自分も働きに出る以外道  
が無かったと知る。フラッシュバックで過去が挿入  
され、徐々にローレンの出自も明らかになるにつれ  
て、ファッションとロックスターに夢中な平凡な田  
舎娘の境遇は、もしかしたらローレン自身のもので  
あったかも知れないと感じさせる。

ジェニファ・ロペス演じるローレン・アドリエ  
ンは、二重の意味でヒスパニック系アメリカ人の立場  
を考えさせる構造になっている。ローレンは、後半  
明らかになるように、メキシコ生まれの孤児でアメ  
リカに養子に出され、現在に至っている。映画の冒  
頭、イルマとの出会いの場面では、金髪(染色)で  
スペイン語もほとんど分からないし、それを公言し  
ている。「他のすべてを捨てても手に入れたと思っ  
た」ジャーナリストという仕事のため、結婚も子供  
も持たない典型的なキャリア志向のアメリカ人女性  
として描かれる。エヴァやその家族の平和な暮らし  
(=メキシコ的後進性)とはまったく対照的な人生を

選択しているキャリア・ウーマンである。しかし、エヴァが犯人やメキシコ社会との戦いの中で成長していくにつれ、ローレン自身も、自分の過去の暗く悲しいメキシコでの生活を正面から受け止め、そこに自己証明の根拠を見つけ出す。ローレンの父親はメキシコの農場で果物の収穫中、ギャングの抗争に巻き込まれ射殺されてしまう。両親を亡くし孤児院にいた彼女を養子に貰い受けた親のお陰で今はアメリカ人となったのであった。エヴァ自身の変化と同時に、ローレンも黒髪、黒い瞳、ビーズ、マリアのペンダントなどでメキシコ人風に変装し工場へ潜入するが、これを機会に、例えば“Born Blond”（生まれつきの金髪）という染髪料を止め、もとの黒髪になり、スペイン語も少しずつ覚えながら、エヴァのようなメキシコ人女性に変化して行く。

このローレンの役を演ずるジェニファ・ロペスは、周知のように、NYブロンクス生まれのプエルトリコ系アメリカ人であり、ヒスパニック系アメリカ人の中で最大の成功者の一人であるといっても過言ではない。リタ・ヘイワース、リタ・モレノ、キャメロン・ディアスなどラティーナに付随する情熱的でセクシーなイメージをうまく利用しながら、芸能界で上昇するロペスは、その我がままな言動も含めて、見事にヒスパニック系のステレオタイプを象徴する存在になっている。映画の中でも、なぜこうも口やかましく自分の都合ばかり主張するのか、なぜいつも身体に密着するボディ・コンシャスな服ばかり着るのか。しかし、1997年の『セレナ』で一躍有名になり「アメリカン・アイドル」となったジェニファは、『ボーダータウン』の翌年、アムネスティ国際賞を受賞し、その翌年、ロサンゼルスで小児科病院のための慈善活動団体“The Maribel Foundation”を設立、「ラリー・キング・ライブ」でも積極的に発言し、ラティーナのステレオタイプを超えた「アメリカン・ヒロイン」とでも呼ぶべき存在へと成長する。

ナヴァ監督は、このようなロペスの人気を利用しながら、そのヒスパニック系アメリカ人という出自を映画の中のメキシコ系アメリカ人に重ね合わせることで、ジャーナリスト、ローレンのリアリティを増幅しようとした。

汚職と腐敗にまみれた後進国メキシコのある町で起こる殺人事件の真相を暴きに、金髪のアメリカ人女性が颯爽と登場し、凶悪な犯人たちと闘い、最後に自己のアイデンティティを発見し悪に挑戦し続けるという構図は、まさにアメリカ人好みの勧善懲悪を描く物語であり、批判もある。何より、ジェニ

ファ・ロペスが目立ちすぎ、せっかく深刻な問題を扱った映画も、その存在の陰に隠れてしまう、というものだ。しかし、このロペスの存在こそ、この映画の核心を構成する表象となっている。すなわち、アメリカ的な女性像＝知的で活発、男勝りで仕事もでき、収入もある「キャリア・ウーマン」、しかも金髪で女性的魅力も持ち合わせ、不正を許せず弱者の味方である女性像は、ある意味の「スーパー・ウーマン」である（そのため男くさいアントニオ・ヴァンデラスの活躍さえかすむ）と同時に、ヒスパニック系移民の成功者の象徴でもある。メキシコが抱く理想あるいは夢見るアメリカのイメージを体現しているのがローレンであり、エヴァも一度は「ウェット・バック」となってリオ・グランデ川を越えようとした。対するメキシコは、エヴァに象徴される先住民インディオやメスティソの貧しさ、無教育、無力さ、迷信、殺人犯達の狂暴さとそれを生み出す社会環境、警察や役人の墮落や腐敗、何より女性蔑視の価値観が際立つ国として並置されている。まさに「第一世界と第三世界が接する世界で唯一の場所」なのである。

## 5 「フェミサイド」と「マチズモ」信仰

先住民の土地を追われ、キリスト教と土着の原始宗教が混じったような宗教的伝統の中、インディオを祖先とするメキシコ人の貧困かつ無教育な女たちは「メスティソ」（白人と先住民インディオとの混血）として、日々の生活を如何に送るかで精一杯であった。そのような環境に生きる人々にとって、北米自由貿易協定によって国境の街に作られた「マキラドーラ」（工場）が労働力を必要としていることは大きな救いとなった。単純労働に耐えられ、従順で、比較的勤勉な若いメキシコ人女性たちは、雇用者にとっては都合のよい人的資源であった。無論、実際には過酷な労働時間と信じ難い低賃金の労働搾取工場である。

このような女性労働者は、しかしながら、メキシコの「マチズモ」から見れば違って見える。すなわち、伝統的にも宗教的にも家父長的男らしさの支配する社会で生活して来た男たちにとって、「妻」や「母親」という純粋な理想の女性像が、心理的には崩壊することになる。家事も育児もしないで、工場で働くことによって女たちは何某かの収入を得、自立も可能となり得る。それまで家庭（社会）の稼ぎ手は男であり、一家を支える大黒柱であった。男とは、「弱い」「無垢な」女たちを守るべき存在であったに

も関わらず、働く女たちの登場によって、自分たちの幻想が崩れ、その結果、若い女たちのイメージは、「金と遊びとセックスにしか興味のない汚い存在」に変化してしまう<sup>20)</sup>。このような女たちは、「マチズモ」の視点から見れば、ただの性的対象にしかすぎない。一旦その性的対象としてのイメージが消費されてしまえば、使い捨ての安価な品物のように、ただの汚い物体でしかなくなる。自己の幻想を破壊した存在への憎しみから暴力が生まれ、猟奇的殺人へとつながったという見方は、ステレオタイプ的ではあろうが、カトリック国メキシコの「ミソジニー」(女性嫌悪)的深層心理の一面を表していると思われる<sup>21)</sup>。このような文脈で「ファミサイド」の訳語を見つけようとすれば、アンビヴァレントな意味を込め「女性愛憎連続殺人」とでも訳す他ない。愛の裏返しとしての憎悪と暴力は、古典的な世界観であろう。それが、ファレスという「国境の町」の社会的にも経済的にも歴史的にも歪んだ一種ブラックホールのような空間で甦った。これも「マチズモ」という観念から離れられないラティーノの一面を強烈に示している。極端な経済格差の中で、メキシコ人女性たちのジェンダーとセクシャリティが、大量生産、大量消費の中で、常に交換可能な使い捨て商品のように非人間的な存在と化し、メキシコの「男らしさ」のはげ口となったと見るのできるのである。

## 6 結 び

20世紀初頭のメキシコ革命の後、ファレスは観光とレジャー産業に力を入れた。それは、アメリカの禁酒法(1919-1933)から解放されたいと望む人々が、酒や麻薬、女を求めて国境を越えて来たからであった。1940年代になると、買春ツアーや商売、移住者などでますます栄えることになる。第二次世界大戦中は、テキサス州フォート・ブリスに軍隊の基地があり、多くの兵士たちがファレスを訪れたのだった。1950年代になると、アメリカ人旅行者にとって、ファレスは「メキシコ人の愛人」を持てるという夢を叶えられる象徴的な町になる<sup>22)</sup>。1960年代になると、メキシコ政府は「国境産業化計画」(1965)などを推し進め、これが後の「マキラドーラ」になる。しばらくはラテン・アメリカの優等生としての時期があったが、1970~80年代に不法移民の数が800万から1200万人まで増加してしまう。1990年代のNAFTAまで、結果的にはその収入の多くを女性に頼りながら今日に至っているとも言えよう。実際、マキラドーラの労働者の70%以上が女性である<sup>23)</sup>。途中何度か

アメリカの移民法が改正されたが、不法移民解決策の決定打にはなっていない。貧困、犯罪、麻薬、マフィア、政治家・役人の汚職、企業エゴ、と八方ふさがりのファレスも、近年は行政の努力にかなり犯罪率も下がって来てはいる。しかし、オバマ政権の新移民法「ドリーム法」を見据え、国境を超える若年者が増加しているといわれる今日、「ボーダータウン」の動向にはますます目を離せない。

- 
- 1) "Mexico to aid bereaved in Juarez," *BBC News*. 21 July 2004. Web.
  - 2) Lise Olsen. "Ciudad Juárez passes 2, 000 homicides in '09, setting record." *Houston Chronicle. Chron.com*. 21 Oct. 2009. Web.
  - 3) "Femicide." Stop Violence Against Women: A Project of the Advocates for Human Rights. *The Advocates for Human Rights*. September 4, 2008. Web.
  - 4) Alicia Gaspar De Alba, ed. *Making a Killing: Femicide, Free Trade, and La Frontera*. (Austin: University of Texas Press, 2010). Print. p.70.
  - 5) "Mexico: Justice fails in Ciudad Juarez and the city of Chihuahua." *Amnesty International*. 28 Feb. 2005. Web.
  - 6) Jenny Karubian. *Representing Femicide at the U.S.-Mexico Border*. Amazon Services International, Inc. 2011. No.95. Kindle.
  - 7) Sergio Gonzalez Rodriguez. *The Femicide Machine*. (Semiotext Intervention Series) Trans.by Michael Parker-Stainback. (Cambridge: The MIT Press, 2012). Print. p.75.
  - 8) *On the Edge: The Femicide in Ciudad Juarez*, Steev Hise. DVD: Illegal Art. 2006. Film.
  - 9) *Ibid.*
  - 10) *City of Dreams*. Dir. Bruno Sorrentino. DVD: Filmmakers Library, inc. 2001. Film.
  - 11) Karubian, *op.cit.*, no.98.
  - 12) Karubian, *op.cit.*, no.96.
  - 13) *The Virgin of Juarez*. Dir. Kevin James Dobson. DVD: Lantern Lane Entertainment, 2006. Film.
  - 14) 「監督インタビュー」『ボーダータウン：報道されない殺人者』(Bordertown) グレゴリー・ナヴァ監督, DVD: アミューズメントエンタテインメント, 2006年. Film.
  - 15) Juan Gonzalez. *Harvest of Empire: A History of Latinos*

- in America*. (London: Penguin Books Ltd, 2011). Print. pp.265-66.
- 16) *Ibid*. pp.269-70.
- 17) Jeffrey S. Passel, D'vera Cohn and Ana Gonzalez-Barrera. "Population Decline of Unauthorized Immigrants Stalls, May Have Reversed." *Pew Research Hispanic Trends Project*, 23 Sept. 2013. Web.
- 18) この一族に関する「グリンゴ」、アリス・ロドリゲスが、日本版『ボーダータウン』の字幕では、「金歯の男」と紹介されるが、これは“Goatee”（あごひげ）を“Gold Teeth”と聞き違えたと思われる。
- 19) Rodriguez, *op. cit.*, p.20.
- 20) Rodriguez, *op. cit.*, p.34.
- 21) 2001年1月、あるエジプト人化学者が、ファレスで過去7年間に200人以上の少女を殺害した容疑でメキシコ警察に逮捕されたが、これが本当の犯人か確証もない上、その後も女性殺人が続いている状況は、当局がこのエジプト人を一種の生贄として事件の終結を図りたいという意図が見える。 (“City of Dreams,” BBC News Correspondent. 12 Jan. 2001. Web.)
- 22) Rodriguez, *op. cit.*, pp.17-18.
- 23) *On the Edge, op.cit.*